



2017年11月8日放送

頻用処方解説 川芎茶調散

筑波大学附属病院 総合診療部 漢方外来 **加藤 士郎**

主な効能・出典

今日は川芎茶調散の解説をしたいと思います。川芎茶調散の主な効能は、かぜと血の道症、頭痛です。かぜによる頭痛で、悪寒、発熱、鼻づまりがあり、時に眩暈がみられることがある時に有効です。婦人の常習性頭痛、とくに月経に関係した頭痛に有効です。

川芎茶調散の出典ですが、『太平惠民和剂局方』（陳師文ら、北宋時代末 1107-1110 年ごろ刊行）が原典とされています。

生薬構成

生薬構成の解説をしますと、香附子 4g、川芎 3g、羌活 2g、荊芥 2g、薄荷 2g、白芷 2g、防風 2g、甘草 1.5g、茶葉 1.5g で、この処方構成されています。熱性と温性の生薬、すなわち身体を温める生薬は、川芎・羌活・荊芥・白芷・防風です。逆に身体を冷やす寒性と涼性の生薬は、薄荷と茶葉です。そして熱に関係のない平性の生薬は、香附子と甘草です。

君薬は薄荷、臣薬は川芎・荊芥、佐薬は羌活・防風・白芷、使薬は香附子・甘草・茶葉です。薄荷・川芎・荊芥・羌活・白芷・防風で風邪を外に追い出します。香附子で気分を改善し痛みを止め、甘草で胃腸を調節し、茶葉でかぜの熱を取り除く作用があります。白芷は前頭部の頭痛に、川芎は側頭部と頭頂部の頭痛に、羌活は後頭部の頭痛に有効であることを考えると、炎症によって起こったどのような部位の頭痛にも有効であると考えられます。

古医書による記載

『衆方規矩』曲直瀬道三（1507-1594,最初の刊行は没後43年を経た1636年）頭痛門には、「思うに、この処方、風氣（すなわちかぜ）に冒されたときや、あるいは婦人の血風の頭痛に最も妙効がある。」（意識）とあります。女性の血の道の頭痛、すなわち月経時や更年期障害の頭痛によいとされています。

長沢道寿（?-1637）らの『医方口訣集』には、「自分が思うに、感風氣（風氣に感ず）の三文字がこの薬を用いる上の大原則をよく表現している。元来から風気を蓄えている人や、かぜで薬を飲んでかぜの治り際にただ頭痛する人には、この処方を用いるのがよい。これすなわち風氣がなお上部に留まっているからである。」（意識）とあります。

有持桂里（1758-1835）の『校正方輿輓』には、「この処方は、内因外因及び偏正を問わず、一切の頭痛に用いて効験あり。」とあります。

現代における使い方

これは二つの報告がありますが、まず初めに、川芎茶調散は、風邪の頭痛すなわちかぜの初期の頭痛に使う処方として有名ですが、頭痛全般に使うことができます。特に女性の片頭痛に使う機会が多いです。そしてこの処方は、五苓散、桂枝茯苓丸と組み合わせて使うとさらに有効な場合が多いという報告（矢数芳英, 伝統医学臨床セミナー「歴史的に頻用された処方」温知堂の頻用処方 清上蠲痛湯. 日本東洋医誌 2010, 61, 774-805）があります。

もう一つ、抗パーキンソン病薬で十分な効果を得られないパーキンソン病の患者さんにおいて、川芎茶調散の運動障害に対する効果を検討しました。川芎茶調散は、パーキンソン病の運動障害に対して有効であり、副作用の少ないドパミン作動薬として期待できるとの報告（静間奈美, 他. パーキンソン病の運動障害に対する川芎茶調散の効果. 日本東洋医誌 2001, 51, 1087-1091）があります。

処方適用のポイント

かぜ症候群では、微熱があり、鼻づまり、頭痛、時に眩暈を伴う時に、比較的初期に投与すると有効なことが多いです。このときに温かいうどんを食べたり、温かいお茶を飲むと効果がさらに増強します。女性では、月経に関係した頭痛に有効なことが多く、ときに月経前の頭痛に有効なこともあります。この時も温かいお茶を多く飲むと効果が増強します。

類方鑑別

一つに葛根湯があります。葛根湯は、感冒初期の頭痛、後頭部項頸部の緊張性頭痛で用います。比較的、胃腸が丈夫で筋肉の発達の良い人が適応となります。

次に、葛根湯加川芎辛夷があります。葛根湯加川芎辛夷は、頭痛もありますが、鼻炎と副鼻腔炎による鼻閉、頭重がつよい時に用います。

次いで麻黄附子細辛湯ですが、麻黄附子細辛湯は、感冒の初期、頭痛や鼻閉があり、日頃から冷え症があり、寒がりの方に良く用います。

次に香蘇散です。香蘇散は、感冒初期で頭重、気うつ、食欲不振はありますが、鼻閉や

頭痛はありません。

次いで桂枝湯ですが、桂枝湯は感冒初期に発熱、咽頭痛、鼻炎症状があり、発汗が多い人に用います。

次に鑑別としては呉茱萸湯ですが、呉茱萸湯は、常習性頭痛で片頭痛をきたす人に多く用います。ただし日頃から冷え症の人が多いです。

次に五苓散が挙げられます。五苓散は常習性頭痛で片頭痛をきたす人に用いますが、日頃からむくみ体質の人に多く用います。

次に当帰四逆加呉茱萸生姜湯です。当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、月経時の頭痛に用いますが、日頃から冷え症で月経困難が多い方に用います。

症例提示

最後に川芎茶調散の典型的な症例をご提示します。患者は47歳、女性、主婦です。

主訴は寒気、鼻づまり、頭痛です。既往歴として慢性胃炎で内服治療中です。現病歴として、来院前日よりかぜ気味、体温が37.4℃、やや寒気がしていました。翌日になり微熱は変わりありませんが、鼻づまりと頭痛を感じたため、来院されました。

現症として、身長161cm、体重54kg、貧血・黄疸・浮腫はありません。血圧は124/74mmHg、脈は74回/分、整、やや緊張が弱いです。胸部や腹部の理学所見、神経学的所見には異常はありません。漢方医学的所見として、ほぼ虚・実中間証、脈候はやや浮ですが虚・実中間、数・遅・中間です。舌候は、大きさは正常、色も淡紅色で正常ですが、やや湿潤で微白苔があります。腹候は、腹力は中等度、心下痞鞭や胸脇苦満、瘀血などはなくほぼ正常です。

治療ですが、微熱があり、鼻づまりと頭痛を主訴とするかぜ症候群、しかも虚・実中間の体力と脈候から考え、川芎茶調散7.5g/日を処方、更に温かいうどんとお茶を飲んで自宅で寝てもらいました。すると翌日には微熱が改善すると共に、鼻づまりと頭痛も改善しました。3日間内服しましたが、内服翌日以降、かぜ症候群は著明に改善しました。